

親鸞仏教センター通信

2008.
September

2008年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第27号

「^{ゆる}赦し」の可能性

親鸞仏教センター研究員 常 塚 聡

2006年10月、アメリカのペンシルベニア州にある小学校に銃を持った男が乱入し、女子生徒5名を殺害し、自らも自殺するという事件が起こった。田園風景のなかで起こった痛ましい事件は日本でも大きく報じられた。しかし、やがてこの事件のことは押し寄せる情報の力の前に記憶の隅へと追いやられていき、ありふれた事件の一つとして片付けられていった。

最近、この事件を扱った『アーミッシュの赦し——なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』(青木玲訳・亜紀書房)という本を読み、この事件のあとに起こった出来事を知り、私は大きな衝撃を受けた。事件の犠牲となったのは、「アーミッシュ」と呼ばれる伝統的な生活様式と信仰を守っている、キリスト教の一派に属する家族の子どもたちであったが、事件でわが子を失った家族は、事件の直後に自らの信仰にもとづいて「犯人を赦す」と述べ、被害者の家族が、自殺した加害者の葬儀に参列したというのである。

アメリカでも、この事態はいささかの困惑をもって迎えられた。「教団が家族の感情を押さえ込んでいるのではないか」「怒りを感じないのは、正常な反応とはいえないのではないか」「犯罪者を安易に『赦す』ことは、犯罪を抑止することにならないのではないか」などといった疑問の声があがる一方で、現代社会に対するアンチテーゼとして受けとめる声もあった。

しかし、アーミッシュの思想によれば、「赦し」はキリスト教徒として当然の行為なのだという。彼らも、容易に加害者を赦すことができたわけではない。しかし、彼らは「神に自らの罪が赦されるためには、自らも他人の罪を赦さなければならない」と考える。そのため、犯人に対する怒りよりも「赦し」を選ぶのだという。

もちろん、アーミッシュの思想を無批判に称讃することはできない。自分が赦さなければ神の赦しが得られない、という考えは、私たちから見れば異質に見える。しかし、どのような宗教も同じように人間の営みである。アーミッシュの被害者家族が、苦悩に満ちた「赦し」というプロセスを選択できたことは、怒りではなく、「赦し」を選択できる人間の可能性を、宗教の違いを超えて示しているように思えるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの——『大無量寿経』を読む——」⑦

自在——本当に自分を取り戻せる世界——

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」の第15回から第17回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第15回では、「六波羅蜜の行」について、第16回では「国土第一の願い」について、そして第17回では「真証と速」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第12回からその一部を紹介する。

(囑託研究員 越部良一)

■「姿色変ぜず」

『無量寿経』（『大無量寿経』）で、釈尊が如来の正覚の功德を自ら語るところですが、「姿色変ぜず」（『真宗聖典』8頁、東本願寺出版部）、つまり、姿も色も変わらないと。たとえ、お釈迦さまであっても、肉体をもっている。肉身を生きている限り、肉身の面は変わっていく。しかし、それを生きている如来自身、如来がこの世に現れ出た「出世の本懐」を生きているいのち自身は、変わらない。これも象徴的な表現だろうと思います。慧見をもった身体というのは、「法身」と言ってもいいと思うのです。法身は変わらない。もちろん肉体は歳をとります。肉体は、生まれて生きて死んでいくものですが、認識する智慧自身が本当に翻った場合に、その翻った喜びが感じられてある時には、それは変化しない。変化しないということは、物質が変化しないのではなくて、智慧自身が、流れゆく時ではない時をもつといいますか、変化しない時をもつ。そういうことを象徴しているのでしょう。

曾我量深先生という方がおられたのですが、

私が出会ったときは86歳でしたから、普通でいえば、もう歳をとられたご老人ですけれども、仏法のはたらきのなかで語り始められるときの曾我先生のお姿は、まさに「光顔巍巍」で、年齢を感じさせない。皆さん、先生の若さというものに驚嘆の思いをもちました。その若さは身体的若さではない。身体は、もちろん86歳ですからどう見てもお年寄りです。でも、仏法を語っている、仏法に生きているその精神自身を人に感じさせる力は、少しも歳をとらない。そういう感じがしました。

大谷大学の授業を毎週1回もっておられて、あとは、頼まれるままに日本全国を布教に回られ、説法してこられる。お疲れになって帰ってこられると思うのですが、「先生、お疲れでしょう」とお尋ねすると、「いえ、旅行してきましたから元気です」とおっしゃるのです。人にお聞きすると、曾我先生が1ヵ月も外に出られないと、本当に老人になっているというのです。おもしろいと思いましたね。普通は逆ですよ。仏法に生きているから、仏法のエネルギーが生かしている。仏法に生きている時間が多いと元気になる。そうでない時間、自宅でもしないでいると、かえってへたばってしまう。

そういう曾我先生のお姿を、私は大変おもしろいと拝見したことでありました。事実、そういうことが起こるんですね。だから、「姿色変ぜず」と。これは何も変なことを言っているのではなくて、事実、そう感ずるのだろうと思います。そういうことがあるということ、目の当たりに知ることができました。どうしてそういうことがあり得るのだろう、曾我先生は何

を依り^よ処^{どころ}に生きているのだろうというよう
な、不思議な思いがしました。

■ 自分自身が自分に在る

そして、「一切の法において自在を得たまえり」(『無量寿経』同頁)とあります。「自由自在」という言葉がありますけれど、これは鈴木大拙先生が、大谷大学に來られて講演をされたときに、よくお話になったことのひとつです。「わしは問題を感じずんじや」と言われて、「自由、自由と言うけれど、制約からの自由、何々がないという自由、そういう自由は、どうもわしゃ、好きじゃない。仏教者のあり方は『自在』である。自在ということは、自分^{おの}に在るということだ」と。「自分自身が自分に在る」と。

人間は、他の衆生といっしょに生きているということに対する感覚があるわけです。自分を他に見せて、他に引きずられている、他に影響を受けているということがあって、それに苦しむことがある。これは自分が自分になれないという問題です。「自分」というけれど、自分がなぜこういう自分なのか、自分ではよくわからない。それでいつも他を気にして、他の前で自分を見せようとしている。そういう自分しかない。

そこで、「自由」を主張すると、自分を立てて、自分でやるのだという傾向が強くなる。だから、他を無視したり、踏みつぶしたり、他の制約を振りほどいたりして、わがままに通じるような傾向が強くなる。自由の主張が強いということは、人間の領分が広がって、自分の好きにやれる範囲がかなり広がったということなのかもしれませんけれど、それで本当に自分が取り戻せるのかというと、どうもそうではない。

例えば、私たちは、普段は仕事があったり、人間関係があったり、うるさくて仕方がない。それで、自由になりたいなどと思うのだけれど、会社でさんざん地獄の目に遭っているとか、愚痴を言いながら仕事人間として生きてきて、いよいよ定年退職になったら、自由なのに、今度は、まったく生きがいがなくなって、

氣力喪失になってしまう。だから、本当は縛られてあることのなかで元気が出ているわけです。糸の切れた凧のようになったら、どうなるかと言えば、ふわふわとどこかへ落ちてしまう。引っ張られているから生きている。だから、自由を求めながら、本当に自由が与えられたら困ってしまうわけです。人間というのは、そういうところがあって、外からも縛られ、内からも縛られ、縛られているなかで何とか平衡^{へいこう}を保とうとしている。でも、どうなったら本当に自分が取り戻せるのかということがわからない。

そこに、鈴木先生は、自らが自らとしておれることが大切なのだと。「自在」、これがあるがたいのだということをおっしゃっていました。自らが自らにあるということが、非常に暗示的に、ひとつのあり方を示しています。煩惱を抱えて生きている人間は、普通では、自分で自分を取り戻すなどということはできない。けれども、いま、この光顔巍巍たる如来がこれから説く法は、そうした愚かな凡夫が、自在を得ることができののだと言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」の講演録(全47回分：2001年11月～2006年8月)が、3巻本として出版されています。問い合わせと申し込みは、樹心社(TEL 042-577-2778)まで。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開(無料)で開催しています。

記

日時：2008年 9月 休 会
10月6日(月)午後6時30分～9時
11月 休 会

場所：有楽町・東京国際フォーラム Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記(京都・東本願寺出版部)まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第28回

日本のことば遣いに見られる 仏教思想の影響

—英語との比較で見えてくるもの—

社会言語学者 井出祥子



井出祥子 氏

2007年11月6日、アルカディア市ヶ谷（千代田区）において、社会言語学者の井出祥子氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。いままでの西洋中心の学問の枠組みでは捉えきれない日本語の語用論を、「わきまえ」という観点から、「場」の中にある人間存在を考えようと試みておられる井出氏に、英語との比較から見えてくる日本語の特徴をおさえながら、特に「日本のことば遣いを支える仏教思想」について語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。（嘱託研究員 本多雅人）

■「場の言語」と「場の文化」

言語学というのは、言語の論理や構造を見る学問です。それに対して、人間が社会の中で言語を使っている、その方面に目を向けた学問を「語用論」と言います。言語は使ってこそことばであるという視点から、国際語用論学会でも、言語研究をいろいろな学問分野から持ち寄ってその成果を伝えていくことにより、どうしたら人間が幸せに共存していくことができるか、どうすれば紛争を少なくすることができるか、そういったことを目指そうとしています。

いままで学問の風は西欧から吹いていたものが、これからは世界中から、つまり、アジアからもアフリカからもイスラム社会からも吹くように方向づけ、また、宗教との関係も言語研究のなかに取り入れていくことを考えています。

さて、日本語の語用論ですが、いままでの「一元的」な西洋の論理では限界があり、十分に捉えることはできません。では、どのように

捉え直したらいいのかについては、清水博先生（「場の研究所」所長）のご見識から多くのことを学びました。欧米の〈役者の言語〉に対して日本語は〈場の言語〉という特徴をもっている、と清水先生はおっしゃっておられます。

鍵と鍵穴の関係で譬えれば、西欧の理論というのは鍵なのです。人間が鍵で、自分で地球の上を暴れ回って何でもストラテジー（strategy 戦略）で行動できていると思っているのです。それに対して、鍵穴というのは待っている方、場面を作っている方ですね。日本の伝統文化は〈場の文化〉であり、それは仏教思想から来ているということも教えていただきました。そこから「わきまえ」ということが表現されているのだと思います。

■「わきまえ」の語用論

人間関係を指し示す言葉については、西欧の言葉に比べて、日本だけではなくアジアの言語では豊富です。英語がIとYouで済むのに対して、日本語では、親族名称や自分を指すことば、相手を指す言葉がいっぱいあります。これは何を意味するかといえば、縁起の考え方が根底に流れているからでしょう。人間関係を大切にしているのです。それから、一人の人が「私」と言ったり、男の方ですと「僕」とか「俺」と言ったり、いろいろな言い方をするのは、場面によって相手によって変えていくわけです。

話し手、聞き手、話題の人との関係を「わきまえ」で、それを指し示すシステムがいろいろあります。指示詞というのは、「これ」とか「あれ」、英語では、“this”と“that”です。

日本語には相手に近いことを示す「それ」というのがあります。日本人は近いか遠いかだけでなく、相手に近いか否かを示すものもあるので、つまり、相手のことを思いやっていることばだということです。ここも仏教思想と少し関係があると言ってもいいでしょう。

もうひとつは、「ね」と「よ」の使い分けです。例えば、「会議は2時からですよ」と言ったときと、「会議は2時からですね」と言ったときの違いです。会議は2時からだということをわかっていない人に対しては、「2時からですよ」と言います。でも、その人がわかっているときは、「2時からですね」と確認しますね。「よ」というのは、相手が知らないから教えてあげるときに使います。情報が自分のほうにあるか、相手のところにあるかを使い分けているのです。

それから、心理文といわれていますが、英語では「Taro is sad」「太郎は寂しい」と言えますけれども、それは日本語であれば、「太郎は寂しがっている」とか「寂しそうだ」と言いますね。やはり、相手の心の中にずけずけと入り込んで言うものではないと、「わきまえて」いるわけです。日本語というのは、このような気遣いをしなくては正しく話せない言語なのです。

どのように「わきまえ」るのかというと、自分と話し手の相対的な位置、さらには、どういう場面で話しているのか、そのときの気持ちもわきまへの配慮となっています。少し例を挙げただけですが、日本語はグローバリゼーションのことばである英語とは違うということがわかると思います。

■ 仏教的人間観の表現

あるご高名な国文学者のウィキペディアに「スキューバダイビングの事故で、娘を亡くしている」と書かれていました。「娘が亡くしている」ではなく、「娘を亡くしている」という表現は、スキューバダイビングの事故で若いお嬢さんを亡くされている。その娘の人生を引き受けて二重生命的に生きている、ということが書かれていると思うのです。それから、「結

婚することになりました」という表現も、「皆さんのお陰で、いろいろな人が関わり合ってそういうことになりました」ということでありますし、「中国語を覚えさせていただきました」という表現も、「私が覚えた」のではなく「覚えさせていただいた」と言うのです。これは、周りの人のお陰でいまの私がある、旅行中に出会った中国人のお陰で中国語を覚えることができたのであるということを言っているわけです。

仏教的人間観の表現として、二重生命観といえますか、縁起という関係性で人は生きている、それから無我、自分をあまり押し出さないことが可能になるような、日本人のことば遣いが多くみられます。

日本語の、ごく当たり前のことば遣いを大事にしていく。それは周り、あるいは人間のかかわり合いを大切にすることば遣いをしていることを、認識することです。これは、日本人が国際的にアピールしていきたい日本発の大切な文化だと思います。（文責：親鸞仏教センター）

※井出祥子氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第17号（2009年3月1日号）に掲載予定です。

井出 祥子（いで さちこ）社会言語学者

1939年、台湾台北市に生まれる。日本女子大学文学部英文学科卒業、国際基督教大学大学院修士課程修了。ハワイ大学客員助教授を経て、元日本女子大学文学部英文学科教授。専門は、言語学、社会言語学、英語学、対照語用論、異文化コミュニケーション。現在、東北大学客員教授、日本女子大学名誉教授、国際語用論学会会長。著書に『わきまへの語用論』（大修館書店）、共著に『日本人とアメリカ人の敬語行動』（南雲堂）、共編著に『講座社会言語科学 第一巻 異文化とコミュニケーション』『文化・インターアクション・言語』（以上、ひつじ書房）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

つめたまえる御^{おん}かたちなり。光明^{こうみょう}は智慧^ちなりとしるべしとなり。「但有^{たんのう}称名^{しょうみょう}皆得往^{かいとくおう}」というは、「但有^{たんのう}」は、ひとえに御^みなをとなうる人のみ、みな往生^{しやうみやう}すとのたまえるなり。かるがゆえに「称名^{しょうみょう}皆得往^{かいとくおう}」というなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四八頁)

語 註

①「光明は智慧なり」親鸞は、世親菩薩の「尽十方無碍光如来」という言葉を注釈するなかで「無明のやみをはらい、悪業^{あくごう}にさえられず。このゆえに、無碍光^{むげこう}ともうすなり。無碍^{むげ}は、さわりなしともうす。しかれば、阿弥陀^{あみた}仏は、光明^{こうみょう}なり。光明^{こうみょう}は、智慧^ちのかたちなりとしるべし」(『唯信鈔文意』『聖典』五五四頁)と述べている。

試訳をめぐって

【原文】「但有称名皆得往」というは、「但有^{たんのう}」は、ひとえに御^みなをとなうる人のみ、みな往生^{しやうみやう}すとのたまえるなり。かるがゆえに「称名^{しょうみょう}皆得往^{かいとくおう}」というなり。

【現代語訳】「但有称名皆得往」の「但有^{たんのう}」とは、ひとえに阿弥陀^{あみた}仏の御名を称える人こそことごとく往生する、というのである。それゆえ、「称名皆得往^{しょうみょうかいとくおう}」とつづ。

に、自己にとらわれているわれわれのあり方では、あらゆる人びとを等しく救い遂げるはたらかしはできない。それで、無碍光^{むげこう}仏は智慧の光となって私たちのうえにはたらき、広大な智慧である本願の海に導き入れてくださるのである。無碍光^{むげこう}仏は、一切諸仏の智慧を集めたおすがたである。その光明は智慧であると知るべきである、ということなのである。「但有称名皆得往^{たんのうしょうみょうかいとくおう}」の「但有^{たんのう}」とは、ひとえに阿弥陀^{あみた}仏の御名を称える人こそことごとく往生する、というのである。それゆえ、「称名皆得往^{しょうみょうかいとくおう}」という。

原文にしたがえば、「但有称名皆得往^{たんのうしょうみょうかいとくおう}」の「但有^{たんのう}」とは、ひたすら御名を称える人だけが、みな往生するといわれているのである」と訳すのが一般的である。しかし、原文に施された句読点は、後に編集者が読みやすさを考慮して付けたものであり、親鸞によるものではない。句読点を打つ位置によって、文章がもつ意味は大きく変わる。

「但有称名皆得往^{たんのうしょうみょうかいとくおう}」。この文を親鸞は、「但有称名^{たんのうしょうみょう}」「皆得往^{かいとくおう}」とせず、「但有^{たんのう}」「称名皆得往^{しょうみょうかいとくおう}」と分けている。そこには、「称名皆得往^{しょうみょうかいとくおう}」(御名を称える人はみな往生する)ということが「但有^{たんのう}」(ただある)であるという、親鸞の意図がうかがえるのではないだろうか。すなわち、「ひとえに」という語句は単に、称える人、その称える「行為」のみを強調するものではない。むしろ、「称名皆得往^{しょうみょうかいとくおう}」という全体にかかって、その「事実」を強調するものである。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

親鸞仏教センター訳・解説

『現代語 歎異抄』

―いま、親鸞に聞く―

(朝日新聞出版・一五七五円(税込))

本紙連載(創刊号から第22号)の『歎異抄』の現代語訳が、このたび朝日新聞出版から『現代語 歎異抄―いま、親鸞に聞く』(単行本)として出版されました。

最近の出版界においても根強い支持のある『歎異抄』ですが、本書の特色は、原文から現代語訳される議論の過程の、特に注目した箇所を抽出して掲載したところにあります。『歎異抄』が呼びかけてくる「生きた言葉」「響く言葉」に触れていた

お求めは、東本願寺出版部(TEL 〇七五―三七一一九・一八二)・朝日新聞出版(TEL 〇三―五五四〇―七七九三)または一般書店で。



『聖典』の試訳（現代語化）

人間とは、『状況存在』である。どのような環境を与えられるか、どのような教えに出遇うかによって、その生き方も変わってくるのである。

「大小の聖人」「善悪の凡夫」。そこには、「僧（出家）」「俗（在家）」という生き方の違いを根底に置きつつも、「聖人」と「凡夫」を分け、さらに「大小」「善悪」という言葉を補って、他人の生き様を色分けしていく当時の人々の姿が垣間見える。

しかし、そのようなあり方を、親鸞の「みなともに」という一語が劇的に翻していく。「自力の智慧をもつては……」、それは、自力の智慧を離れることなど決して出来ない、人間存在の悲しみを湛えた言葉でもある。そこに、「みなともに」の一語が輝きを増してくる。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳③

原文

「十方世界普流行」というは、「普」

は、あまねく、ひろく、きわなしという。「流行」は、十方微塵世界にあまねくひろまりて、すすめ、行ぜしめたまうなり。しかれば、大小の聖人、善悪の凡夫、みなともに、自力の智慧をもつては、大涅槃にいたることなければ、無碍光仏の御かたちは、智慧のひかりにたましますゆえに、この仏の智願海にすすめいたまうなり。一切諸仏の智慧をあ

現代語訳

「十方世界普流行」というのは、

「普」は、あまねく、広く、限らないという意味である。「流行」とは、どのような時、どのような所にも余すところなく行きわたって、衆生を教え、励まし、導きすすめて、その御名を称えさせてくださることである。そうであるから、すぐれた聖人であれそうでない人であれ、在俗の生活者であれ——善人であっても悪人であっても、人間であるならば皆共

親鸞仏教センターの動き

（2008・6・8）抄出

■2008年

- 6・1 情報誌「B.E.」第15号、研究誌「現代と親鸞」第15号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第26号を発行。
- 6・3 第11回英訳「教行信証」再版編集会議
- 6・6 第306回研究会議（研究・交流・出版等の協議と企画）以降、定期的に会議を開催。
- 第25回「唯信鈔文意」研究会
- 6・13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 第99回英訳「教行信証」研究会
- 6・17 第26回「唯信鈔文意」研究会
- 第16回（通算・第67回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・18 人事発令（萩野顕書記が総務部書記に発令）
- 6・20 人事発令（辻本鈴書記が発令）
- 第2回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 6・26 第71回清沢満之研究会
- 6・28 嵩海史氏（前研究員）に真宗大谷派擬議が授与される。
- 春近敬囑託研究員に真宗大谷派講師が授与される。
- 6・30 人事発令（木曾修事務長が発令）
- 7・1 長谷園英信前事務長が大谷大学学監・事務局長に就任。
- 人事発令（前田専学客員研究員、中津功非常勤囑託が再任。近藤順子囑託が発令）
- 7・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7・22 第17回（通算・第68回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 人事発令（本多雅人、越部良一、法隆誠幸、春近敬が囑託研究員として再任）
- 8・8 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・29 第18回（通算・第69回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 9・1 「親鸞仏教センター通信」第27号を発行。

● 英訳『教行信証』研究会報告 ⑥ ●

鈴木大拙訳「正信念仏偈」について

大谷大学非常勤講師 羽 塚 高 照

英訳『教行信証』研究会では、発足以来、鈴木大拙訳『教行信証』の冒頭からの読解を行い、現在は「行巻」の途中まで読み進めている。また、2007年4月からは「行巻」の読解を一時中断し、「正信念仏偈」を取り上げて、「難中之難無過斯」までの大拙訳からの試訳を終えたことである。また、定例の研究会に加え、2007年6月22日には、ニューヨーク州立大学アルバニ校准教授のマーク・L・ブラム (Mark L. Blum) 氏をお招きし、講義をいただいた。今号では、ブラム氏も講義のなかで取り上げた「正信念仏偈」の下記の句について、氏の見解も交えながら、試訳と訳注の一部を報告する。

なお、試訳済みの大拙訳「正信念仏偈」並びにブラム氏の講義は、『現代と親鸞』第16号(2008年12月1日号)に掲載の予定である。

略号：

『聖典』：『真宗聖典』東本願寺出版部、1978年

BDK: *Kyōgyōshinshō: On Teaching, Practice, Faith, and Enlightenment*. Hisao Inagaki (tr.), BDK English Tripiṭaka 105-I, Numata Center for Buddhist Translation and Research, 2003CWS: *The Collected Works of Shinran, Volume I: The Writings*. Dennis Hirota et al. (tr.), Jōdo Shinshū Hongwanji-ha, 1997DTS: *The Kyōgyōshinshō: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*. Daisetz Teitarō Suzuki (tr.), Shinshū Ōtaniha, 1973

原文 (『聖典』 p. 204)：

- ①本願の^{しょうじょう}名号^{こう}は正定の業なり。
- ②至心^{ししん}信^{しん}樂^{りやく}の願を因とす。
- ③等覺^{とうかく}を成り、大涅槃^{だいねはん}を証することは、
- ④必^{ひつ}至滅^{しめつ}度の願成就なり。

DTS (p. 76):

The Name symbolized in the Original Prayer is the right practice which rightly assures [one to be born in the Pure



マーク・L・ブラム (Mark L. Blum) ニューヨーク州立大学アルバニ校東洋学科准教授

1950年、米国ロサンゼルスに生まれる。カリフォルニア大学バークレー大学院博士課程仏教学科修了。文学博士。東京大学仏教学研究員、大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員、親鸞仏教センター客員研究員。研究課題は、仏教思想・文化の変遷。また、日本の浄土教、中世日本の仏教。仏教の倫理に関する現代性への応答など。

著書に、『The Origins and Development of Pure Land Buddhism: A Study and Translation of Gyōnen's Jōdo Hōmon Genrushō』(OXFORD UNIVERSITY PRESS 2002)。論文に『Truth in Need: Kiyozawa Manshi and Søren Kierkegaard』(『THE EASTERN BUDDHIST』NEW SERIES Vol. 35 Nos. 1 & 2 2003) など多数。

Land].

The Prayer of sincerity and faith is its efficient cause.

That Enlightenment is attained, that great Nirvāṇa is realized —

This is due to the fulfillment of the Prayer which assures the devotee of his deliverance.

試訳：

- ①「本願」がかたちなきものをかたちをとおして表わしている「御名」こそ、まさに、[浄土に生まれることを]保証してくれる正しい行いである。
- ②真実と信心とを誓っている「願」は、その直接の因である。
- ③「さとり」が獲得されること、大いなる「涅槃」が現実のものとなること——

- ④これは、ひとえに、念仏の行者の救いをまちがいなく保証する「願」の成就によるのである。

試訳をとおして見えてきた問題：

① 「本願の名号」の DTS を直訳すれば、「本願において象徴化される御名」。上記の他、「本願から立ちあらわれてくる御名」などの訳が研究会において検討された。

② 比較のため、BDK と CWS を挙げる。

BDK (p. 76):

The vow of sincere mind and joyful faith provides the cause of our birth;

CWS (p. 69):

The Vow of entrusting with sincere mind is the cause of birth;

DTS では、「信」「信心」「信楽」は、ともに faith で訳されることが最も多いが、「信心」は “believing mind”、「信楽」は “faith and joy” と訳されることもある。

翻訳ということには、原意との間の必然的なズレが生じることとなるが、宗教的言語を翻訳する際には、その問題が顕著になる。親鸞思想におけるこの問題は、その中心概念の一つである「信」あるいは「信心」はいかにして翻訳可能か、という具体的な課題を中心にして議論されてきた。特に、CWS が「信心」をローマ字音写の shinjin のままにしておくという方法をとったことが、賛否を含む盛んな議論を呼んだ。この問題は、当研究会が行った外部講師招聘研究会でも必ず話題となった。詳しくは、各研究会報告を参照のこと（坂東性純氏『現代と親鸞』第7号、安富信哉氏同第10号、ヒロタ・デニス氏同第12号、佐藤 平 顕明氏同第15号、マーク・L・プラム氏第16号を予定）。

BDK と CWS は、「因」を原文にはない birth を補って訳している。DTS はそうしていない。この点についてプラム氏は、「DTS は、因に対する果が何なのか特定されていないため、より神秘的な意味合いを生んで、宗教的な関心をひく」という。BDK と CWS では、原文にはない「往生の」因に限定してしまっている。これは重要な点だとプラム氏は指摘する。親鸞はここで「往生」をゴールとしているわけではないからである。DTS は、「往生」「等覚

「大涅槃」を融合する親鸞の教義をよく伝えるという点で、非常に成功しているとプラム氏は言う（引用者による要約）。

③ 原文「等覚」を、大拙訳は “Enlightenment” とする。厳密に言えば、この「等覚」は、『尊号真像銘文』（『聖典』p. 531）で白釈されているように、「正定聚のくらい」あるいは「弥勒のくらいとひとし」のことを意味するが、大拙訳はこの意味を出さない。

④ 「願」「誓願」「弘誓」を prayer と訳すことは、大拙訳の特徴の一つとして注目されてきた。大拙は、『教行信証』の翻訳以前は「願」の訳語に vow を用いており、『教行信証』の英訳において初めて prayer を用いたと思われる。prayer は、キリスト教的な背景を強くもつ言葉であるが、英訳『教行信証』の「序文」として準備され未完のままとなった Daisetz Suzuki. “A Preface to the *Kyōgyōshinshō* (unfinished),” *The Eastern Buddhist*, New Series #6-1, 1973 には、「願」の訳語には、従来用いられてきた vow よりも、キリスト教的なおもむき (flavour) があるが、prayer のほうがよい (better) と考えるようになった。ただし、その prayer は決して特定の結果 (result)、報酬 (reward)、補償 (compensation) を期待するような恩寵的な意味ではない。阿弥陀の願はその存在に秘められた根源から発するはたらきであり、絶対に自由であって、遊戯的 (vikrīḍita; sportive) である」(pp. 14-16 引用者による要約) という言及がある。

プラム氏は、大拙の「願」の訳語としての prayer について、以下のように述べている。

「日本語で『祈り』『祈祷』と訳される prayer は、一神教の文脈では、〈絶対者〉たる神と人間とを橋渡しするものであるが、これは人間側からのはたらきかけであって、神が人間に何かをお願いするということとはありえない。ところが、鈴木訳で、仏あるいは菩薩が衆生に対して prayer をかけていると表現されるということは、仏あるいは菩薩は〈絶対者〉ではない、という理解がそこにあるはずである。大拙師の理解では、人間と仏あるいは菩薩とが、非常に近い地平に立っている。そして、菩薩の prayer に、人間は感応しなくてはならないという関係が成り立つことになる」(引用者による要約)。